

トカラの悲劇

日本板硝子(株)

橋 高 重 雄

Tragedy in Tokara Islands

Kittaka Shigeo

Nippon Sheet Glass Co., Ltd

日食病 【にっしょくーびょう】
ウイルス性疾患。日食ウイルス (*Eclipse corona*) の保有者 (全人類の95%に及ぶと推定される) がコロナから放射される電磁波を浴びると、ウイルスが活性化して発病する。皆既日食のあまりの美しさに魅了され、何度でも見ようと世界各地に旅をするようになる。治癒例は皆無。

黒い太陽を求めて

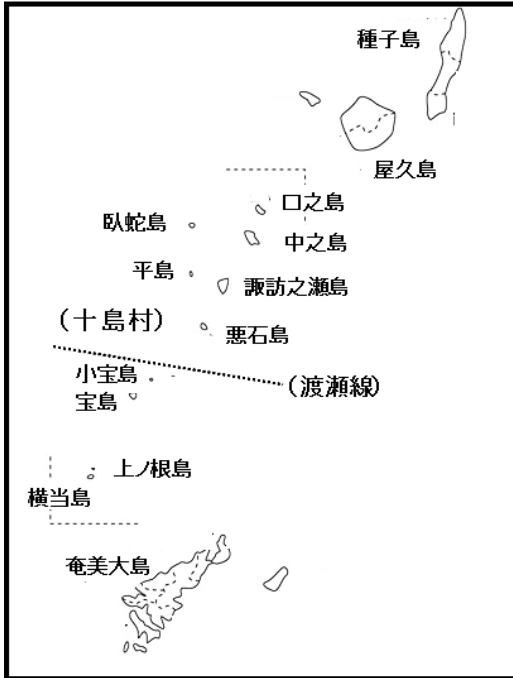
子供のころに読んだ科学の本には、よく「皆既日食」と称する目玉焼きのような白黒写真が載っていたものである。皆既日食自体は「地球上の一点でじっと待っていれば、400年に一回見ることができる」というくらいのめずらしい現象であるし、太陽が消えてなくなるのは大したスペクタクルであるに違いない。それでも、目玉焼き写真はそれほど素晴らしいものとは思えなかった。

しかし1988年3月18日、硫黄島沖の観測船上で一瞬にして日食病を発病してしまった。空にあいた穴から透明な水色のコロナが大きく広

がり、月の縁からはみ出したピンク色の紅炎と見事なコントラストをなし、筆舌に尽くしがたい眺めだった。これ以上のものがこの世にあるのだろうか…

皆既日食の実物と写真に月とスッポンほどの違いがある理由は、コロナの明るさが太陽から離れると急速に落ちることにある。人間の網膜は光度差の大きい対象を一度にとらえる能力があるのに対して、フィルムやCCDではコロナのごく一部にしか露出を合わせることができない。そこで、外側は真黒、内側は真白の目玉焼き写真になってしまうわけである。ただし、最近では露出を変えた映像を画像合成処理することにより、見た目に近い写真が発表されている。

2009年7月22日の皆既日食は「人間の住んでいる日本領」で起こるものとしては46年ぶりであり、皆既継続時間は6分以上の最長クラスであった。こうなるともう居ても立ってもいられず、一般常識からすると法外といえる価格の日食ツアーに申し込んでしまった。日食病には「金銭感覚の麻痺」という恐ろしい症状もある。長時間の皆既食が見られる場所は、屋久島と奄美大島の間にあるトカラ (吐噶喇) 列島。「日本最後の秘境」とか「離島のチャンピオン」とかいった異名をもつ島々である。



トカラ列島の地図

十島村

トカラ列島はそのまま十島村（としまむら）という自治体になっていて、住民 675 人が有人 7 島（北から口之島，中之島，平島，諏訪之瀬島，悪石島，小宝島，宝島）に分散している。各島にそれぞれ小中学校が設置されているので、人口の一割は先生とその家族で占められているとのこと。義務教育を維持するだけでも大変である。有人 7 島には、鹿児島市と奄美大島間を往復する村営フェリー「としま」が順番に停泊して生活物資を運んでいる。「東北六県の知事が会議をするならば、集合場所は東京が一番便利」という冗談話を良く聞くのであるが、十島村の役場は同じ理由？によって、冗談ではなく鹿児島市内に設置されている。

傲慢な人間は陸地のみならず海上にまで「領海」とか「経済水域」とかいった線を引き、これを勝手に超えると銃弾やら砲弾やら漁船やらをぶつけられてしまう。野生生物に国境線は関係ないが、種類がガラリと変わる分布境界線があり、日本列島には 2 本の境界線が東西に走っ

ている。そのうちの一本は本州と北海道を分ける「ブラキストン線」で、この線の北側にはヒグマ、キタキツネ、シマフクロウが、南側にはツキノワグマ、ホンドリツネ、ニホンザルが生息している。もう一本の境界線は熱帯と温帯を分ける「渡瀬線」で、これが十島村を分断している。ここで重要なのは「渡瀬線の南側の島にはハブが生息している」ということであり、この毒蛇との遭遇だけは御免蒙りたいので観測地は北側にある「平島（たいらじま）」に決定した。ここはハブどころか「蛇がいない島」でもある。

平島

平島は人口 78 人。島の中央部に小中学校（正確にはその分校）があり、12 名の生徒が 4 クラスに分かれて授業を受けている。12 名といっても純粋な島の子供はわずか 3 人で、あとは先生の子供と山村留学生で占められている。とはいっても学校としての一通りの施設はすべて揃っており、バスケットコートがとれる立派な体育館もある。平島に着いた日の歓迎会と、フェリーの離島時に子供たちが披露してくれた見事な太鼓演奏は、一生の思い出となった。夏休み中なので、ツアー客の宿泊所はその体育館の床に並べた折りたたみベッドであった。（日食ツアーでは標準的な施設）

トカラの島々には、それぞれ独自の神様や行事があり、悪石島の神様「ボゼ」は特に有名である。平島では菅笠をかぶりピロウの葉をまとった「福德神（ふっとこじん）」が、手に持つ



港の岸壁に描かれた福德神

た竿で地面をバシバシ叩きながら家々を回って接待を要求する行事がある。この福の神は歓迎会にも出現してツアー客を楽しませてくれた。

赤い鳥を求めて

日本列島では500種以上の野鳥が記録されているが、「赤い鳥」はコマドリ、アカショウビン、イスカ、ベニマシコなど数種類しかおらず個体数も少ないので、めったに見かけることはない。ところが、トカラ列島にはコマドリによく似た「アカヒゲ」という赤い小鳥が生息している。アカヒゲの分布は屋久島から琉球列島にかけての範囲で、日本特産種にして天然記念物、十島村の村鳥でもある。そこで、今回のツアーではこの赤い鳥を見ることも、大きな目標とした。

平島の集落に着くと、さっそくあちこちから「ヒーヒョロヒョロヒョロ」とアカヒゲの美しいさえずりが聞こえてきた。これは楽勝とばかりに双眼鏡を持って探しに出かけたが、相手はどうやら深い藪が大のお気に入りの場所らしく、目の前で声はすれども姿は見えず。声をたよりに炎天下の藪の前でじっと待ってみたり、道を歩きながら探した結果、4日間で2回だけ姿を見ることができた。観察時間は合わせて4秒くらいであったが…

※蛇足

アカヒゲの学名は *Erithacus komadori*、コマ

ドリは *Erithacus akahige* であり、完全に入れ替わっている。両方を同時に学会登録したときに間違えたのであるが、学名は一度決まると変えられないのでそのままになってしまった。

※蛇足の蛇足

最近、中国が「国鳥」を決めようとしている。最初はタンチョウとトキが候補に挙がったのであるが、タンチョウの学名が *Grus japonensis* (意味は「日本の鶴」)、トキは *Nipponia nippon* (説明不要) という理由でどちらもボツになったとのこと。大中国の力をもってしても学名は変えられませんから。

トカラの悲劇

そして、肝心の皆既日食本番はどうだったかという、読者もご存じのとおりトカラ列島は全域暴風雨となり、「トカラの悲劇」として日食の歴史に深く刻まれることとなった。コロナは見られなかったものの、空全体が厚い雲で覆われていたために「真っ暗な日食」を体験することができた。(晴天での皆既食は、コロナと360°全方向の夕焼けのため、かなり明るい)

日食予報のない時代の人々が同じような「突然の闇夜」を体験すれば、きっとこの世の終わりが来たとばかりにパニックに陥ったことであろう。そのくらいの暗さであった。

でも、やっぱりコロナが見たかった…